



【今週のニュース】

# 世界への発信手段を身につける方策探る

## ■世界への発信手段を身につける方策探る

## ■個性的教育課程の研究開発を促進

## 文部省予算①初等中等教育局

### 世界への発信手段を身につける方策探る

—— 発足した英語指導改善懇談会 ——

英語指導方法改善の推進等に関する懇談会座長 中嶋嶺雄

中曾根文相の私的諮問機関、「英語指導方法改善の推進等に関する懇談会」が一月二十六日、発足し、懇談を開始した。新学習指導要領では、コミュニケーションとしての外国語学習を一層重視する方向が示されたが、読解、文法に傾斜した受信型学習が長く続いてきた現状を打破するために、さらに抜本的な改善方策を提案する役割を担う。同懇談会の取り組み課題と懇談事項のポイントを、座長の中嶋嶺雄・東京外国語大学長に聞いた(編集部)。

### 世界へ向けての発進力重視

日本の外国語教育は先進諸国から学ぶための「受信型」能力を重視してきた伝統を背負っている。外国から吸収する上では大きな成功を収めたが、今後は双方向型のコミュニケーション

が重要である。そのために学習指導要領が改訂されるたびに読解からコミュニケーション重視型の学習への転換が叫ばれたものの、受信型の外国語教育は根本的には変わらないままに今日まで来たと言える。それなればこそ、このたび、

文部大臣の私的懇談会とはいえ、英語教育の抜本的改善を図る施策を検討するため、各界各層からの代表を集めて、具体的改善の方向を論じ合う会議が発足した意義は大きい。国際的なコミュニケーションを担うことが可能な人間を育てるには、英語教

育をどのように改善するか、抜本的な具体案を探って提案し、政策化に反映させたい。

なぜ、英語に絞って検討するのか、については、首相の私的諮問機関である「二十一世紀日本の構想」懇談会でも、将来、英語を第二公用語にすることも検討すべき課題だと提言しているように、国際語としての英語の存在が決定的に大きいという実態がある。英語によるコミュニケーション能力の育成は日本だけでなく、国際的な課題でもある。本懇談会は日本が二十一世紀に世界の中でどのような位置付けで役割を果たし、国際貢献を

担うのかを、日本文化の特質とも併せて具体的に英語教育改善の方向を示すという大きな課題を背負っている。

まだ、発足したばかりであり、具体的な改善点を示唆するまでには至っていないが、まず、明確にしなければならぬこととして、次のような諸点を論じることが重要であろう。

### 懇談の入口での三つの課題

英語教育の改善が重要であるという点では共通しても、その方法についてはさまざまな考え方があり、十分に議論して方向を定めていかなければならない。

第一点は、どの範囲の学習者を主対象に想定して改善するかである。日本人全員の英語力を向上させるのか、あるいは外国人とのコミュニケーションを持つ機会が多く日本についての発信能力のある人々、極論すればエリートを対象にしてその英語教育の改善策を検討するのか、この点についての考え方はさま

ざまである。

第二点は、どういう能力を持つことを目標にするのかである。なめらかに意思を伝えられる会話力が目標なのか、つたなくとも英語でのディベート、ディスカッションが可能なの力をつけることが重要なのか、といった目標設定についても判断しなければならぬ。

第三点は、早期教育に踏み込むかどうか、ということである。年少であるほど、外国で生活すればたやすく外国語を身につけられる半面、帰国すれば速やかに忘れる傾向があり、早く学習を始めるのがよいとは言えないとの意見もある。一種のメンテナンス、幼少期に覚えた外国語を保持するための手立ても必要だ。

以上の諸点は相互に絡まりあっている。どのような能力を目指すか、どの層を対象に考えるかによって、英語学習を始める時期をどう考えるかについても異なってくるのが想定される。

### 方向を提案して実験を促す

これらの点は、従来から論じられてきていて、なかなか一致を見なかつた問題でもあり、われわれの懇談会が十二月まで一年足らずの懇談期間で結論を出せるのか、とあるいは危ぶむ向きもある。

しかし、これらの問題は十年論議しても、結果は同じで平行線をたどるのである。懇談の中心について方向を出さないと、二十一世紀に間に合わない。

まず懇談会としての結論を出して、それに基づき、実験してみるといふ視点が大切であろう。懇談会の役割はそのように多様な考え方を、意見を整理して方向を提案することにあるとらえている。

懇談事項には①英語指導方法の改善②担当教員の採用、研修③大学、高校の入試の在り方④外国語指導助手(ALT)の活用方法⑤英語を聞き話す機会を大

量に提供する方策⑥その他、が挙げられているが、これらの事項も相互に連動しており、切り離しては考えられない。

英語学習を読解中心から自分の意見を明確に言えるように発信型に変えていく必要があるが、それには英語教師自身が十分な発信能力を身につけていなければ指導できない。研修の在り方、そのための人材や予算措置といったことを並行して検討する必要がある。

早期教育について指摘したように、早くから学習を始めるだけでは不十分で、どう保持、発展させていくかを合わせて考える必要もある。そのためには小学校で学習を始めるなら中学校では、高校では、大学では学習をどうするのか、といったように連動して検討していかなければならない。問題を個別に論議するよりは、先に述べたさまざまな考え方を検討して、実験と検証が可能な方策を提案していく必要がある、と私は考えている。